



検査部だより

尿検査 Part 2

第13号 平成29年5月

前回（第4号 平成28年8月）、尿検査についてお話ししましたが、今回は尿に試験紙をつけて、色の変化で判定する尿定性検査のお話をします。当院検査室では、比重・pH・蛋白・糖・ケトン体・ビリルビン・潜血・ウロビリノーゲンを測定しています。

尿比重

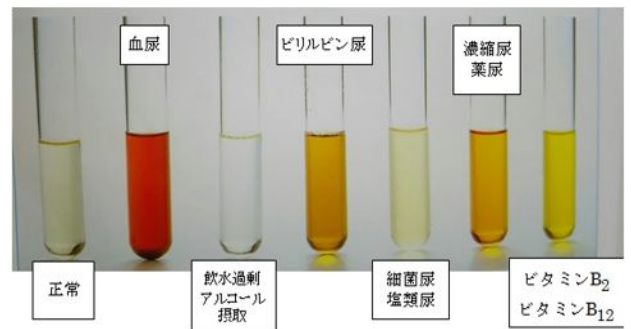
尿の水分と溶けている物質の量の割合を尿比重といいます。

腎臓は体内の水分の調節をしています。

腎臓の働きに異常があると、水分の量を一定に保つことが出来なくなります。

尿比重で腎臓が正常に機能しているか調べます。

ただし、水分や塩分の摂取量により変動しやすいのでバランスが大切です。



「尿検査 その知識と病態の考え方」
河合忠他著/メディカル・ジャーナル社
より引用

尿 pH

尿の酸性・アルカリ性を調べます。健康な人は弱酸性です。

アルカリ性は尿路感染症、嘔吐、酸性は発熱、糖尿病、などが疑われますが、食事内容でも左右されます。植物性食品（野菜、海藻類）はアルカリ性側に、動物性食品（肉類）は酸性側に傾きます。

尿蛋白

蛋白は腎臓でろ過、尿細管で再吸収されて体内（血液）に戻ります。

腎臓や尿路系に異常があると、血液に戻ることが出来ずに尿に出てきます。しかし、運動後や疲れなどでも陽性になることがあります。

尿糖

血液の中には一定量のブドウ糖が含まれていますが、血液中のブドウ糖が増えすぎたり腎臓の働きが低下している場合、尿に糖が出てきます。

尿糖が陽性の場合、**糖尿病**が疑われますが、**内分泌疾患、膵炎、腎疾患**などでも異常値が出ます。食事内容・量、食事の時間にも大きく左右されますので、空腹時に検査するか、食事をした時間を伝えることが大切です。





尿ケトン体

体内のブドウ糖が不足すると、かわりのエネルギーとして脂肪が分解されます。その時に出来るのがケトン体（アセトン、アセト酢酸、3-ヒドロキシ酪酸の総称）です。ブドウ糖をエネルギーとして利用することが難しくなる**糖尿病**や、糖分が不足しがちな**ダイエット**などで、ケトン体は増えてしまいます。ただし、脂肪の多い食事、運動、発熱などでも陽性になる場合があります。

尿ビリルビン

胆汁に含まれる色素のことです。肝臓から胆汁となり腸管に排泄され、尿に出てくることはありません。しかし**肝臓や胆道に異常**があると、血液中のビリルビンが増え、尿中に出てきます。尿中ビリルビンが多くなると尿は黄色く泡立つようになり、色も黄褐色となってきます。

尿潜血

尿に血液が混ざっている状態です。**腎臓や尿路に異常**がないか調べます。肉眼で尿に血液が混ざっているのがわかる場合もありますが、少量だと検査をしなければわからない場合もあります。疲れや月経でも陽性になることがありますので再検査を行う必要があります。

尿ウロビリノーゲン

ビリルビンが腸内で分解されたのがウロビリノーゲンです。便と一緒に排泄されるのがほとんどですが、一部は肝臓から血液に入り腎臓から尿に出てきますので、健康な人も少量のウロビリノーゲンが検出されます。当院では正常（ノーマル）の意味で**N**と表記しています。したがって、陽性だけではなく陰性の場合も異常となります。**肝臓や胆道系の病気**を疑います。



以上のように尿定性検査で沢山のことがわかります。しかし、病気以外でも異常値が出る場合もあります。基準値から外れたからといって病気とは限りません。他の検査やいろいろな情報をもとにして医師が総合的に判断します。

参考資料「病院で受ける検査と数値がわかる」 監修 済陽高穂／林泰（株式会社英和出版社）

